

今から28年前、後にいわゆる「分裂報恩講」と呼ばれるようになった本山の御正忌報恩講のその現場に、たまたま私は居合わせました。

当時の法主が内局の出仕願いを拒否したり、25日の御伝鈔拝読が中止になったりと、異様な状況の中で勤まっていた報恩講でしたが、28日の満日中には、法主が離脱寺院と共に白洲から御影堂へ入ろうとするのを阻止され、広縁でお勤めをするという事態になりました。

今日、全国的に報恩講の参詣者の減少を嘆く声が聞かれます。真宗の宗風、伝統からすると、これはこれで深刻なことではあるでしょう。しかし、本当に問題なのは「一人なりとも、人の、信を取るが、一宗の繁盛に候」と蓮如上人が言われるように、ただただ私が信をいただくという一点こそが最も大切なことなのでしょう。

かつての教団問題の時は、宗門に対する危機感が溢れていました。現在、かつてのような危機は一応は脱しているようです。しかしややもすると、報恩講でさえただの年中行事化し、参詣の多少のみにとらわれてしまうと、大切な事を見誤ってしまいかねません。

『御俗鈔』の「他力本願のことわりをねんごろに聞きひらきて、専修一向の念仏行者にならん」ということが、私自身の上に明らかにならないとするならば、それこそが重大な危機なのでありましょう。